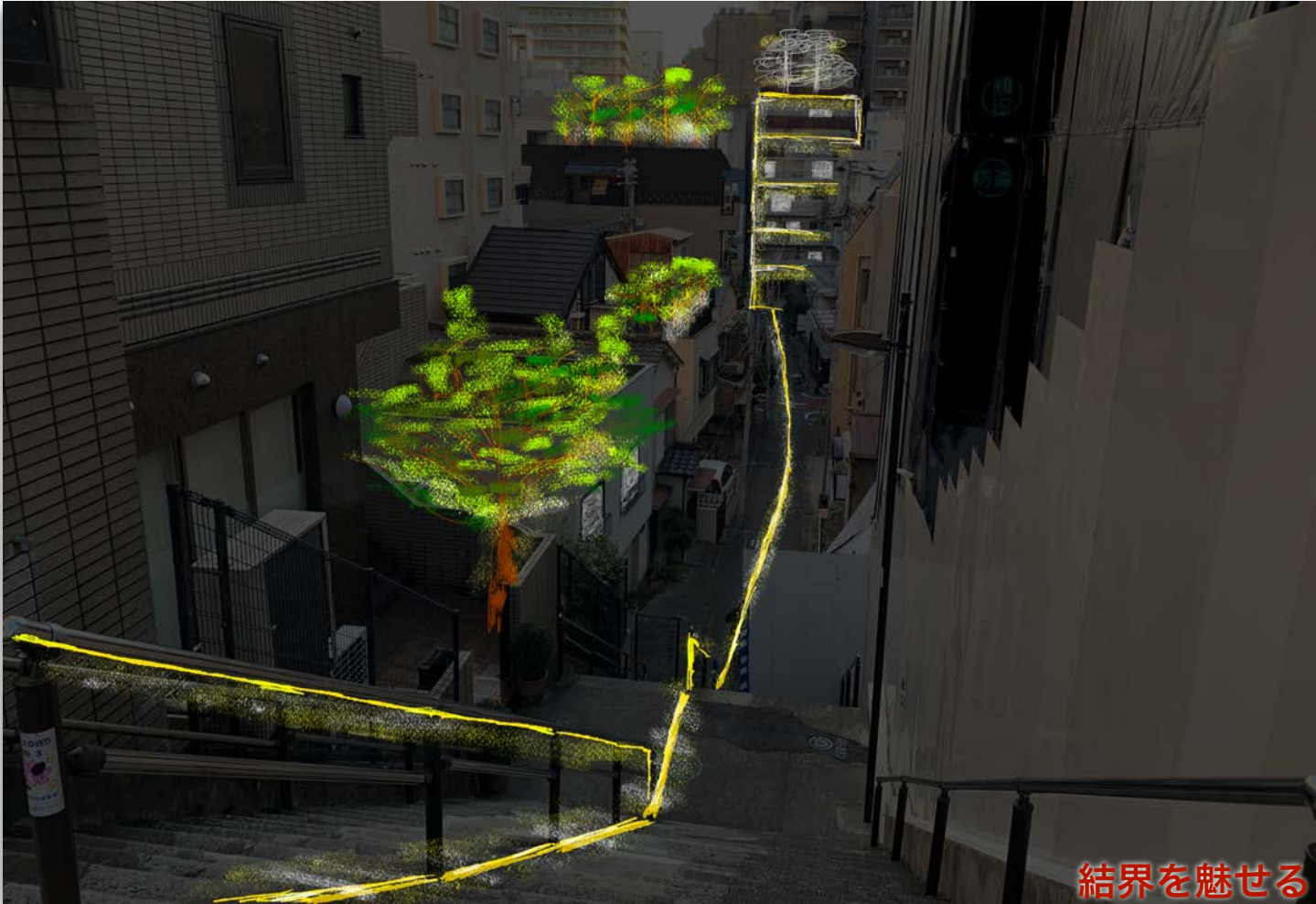




聖別された新旧インフラ立体交差



淡路平坂



結界を魅せる



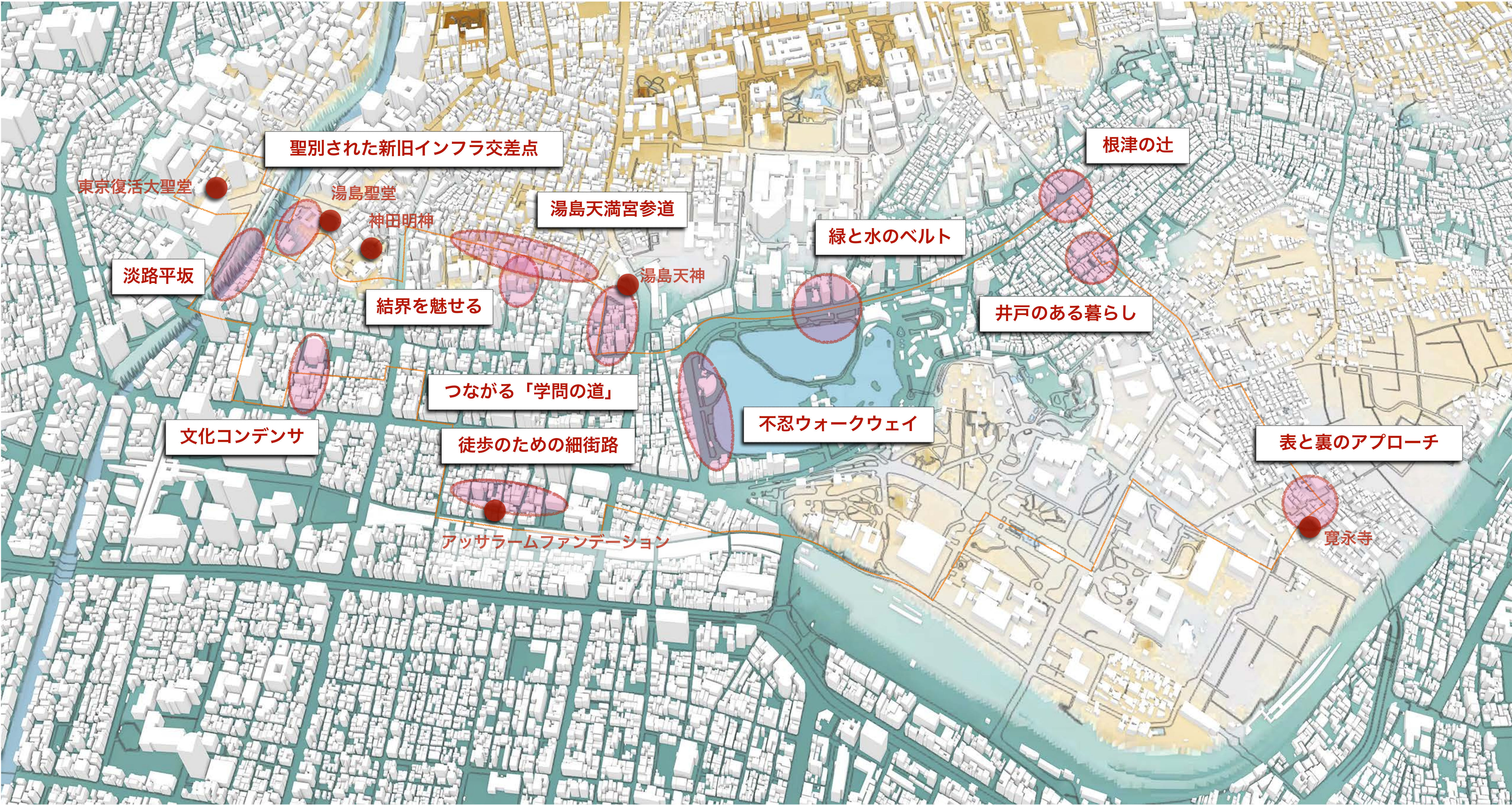
文化コンデンサ



湯島天満宮参道



つながる「学問の道」



base-map drawn by Takahiro YOSHIDA, using Project PLATEAU

ここで暮らしている子どもたちにとっては、そこが故郷であり新しい東京人となります。

境内は公共の道のような場所なので自由に歩いてほしい。最近近所に子どもが少ないせいか境内で遊ぶ子どもを見ないです。

パンダ広場からモスクのビルまでつながってバザールになるといいですね。

マンションでも「まち」のお祭りとして案内を出してくれています。

丘の上はお澄まししている。

バザールとはマーケットプレイスで、食べる、買う、会うという機能があって、人が夜も昼も集まってくるところです。

まちは生きている2045 百路千辻



子どもたち

人は緑を求めてやってくるのか。

道に沿って連続性がある。

手書き手作りのお札を配布したらSNSで広がってたくさんの人が 祈願に来てくれました。

お祭り×商店街×御徒町＝バザールストリート。

町の人が交流できる快適な場所ができるいいですね。地域の町会さんと相談して。

お菓子につられて通った記憶があります。きっかけはそんなもので構わないので人とお寺が継続した関係をもてるといいですね。



根津の辻

根津駅と根津一丁目交差点は、住宅街と商店街が交差する生活のハブである一方、谷根千地域への南側からの入り口でもあります。同時に東大と芸大、上野と千駄木を結ぶ交差点にもなっています。ローカルチェーンスーパー赤札堂の持つ地域の生活感を残しつつ、今は埋もれている駅出口をシンボル化するデザインを施すことで、地域の様々な魅力を発信できます。

井戸のある暮らし

言問通りから一本入った細道には、2022年現在も井戸が残っています。こうした、そこここにある裏道は、地域の人びとの生活の場であり、本郷から上野を結ぶ歩道でもあります。点在する井戸の水脈は、災害時の断水などを考えても、人々の生活を守るいわば毛細血管です。「井戸端会議」ができる空間として生活・移動・コミュニケーションがつながります。

表と裏のアプローチ

寛永寺は、谷中霊園・上野公園・言問通りを結び、上野・寛谷・日暮里をつなぐ核でもあります。一方で、寛永寺への経路は明瞭ではありません。北側の谷中霊園から延びる道と一体化したデザインとすることで、表と裏、生と死をつなぐ精神文化の価値を高めることができます。

緑と水のベルト

上野公園と本郷台地は、一見すると不忍通りで分断されています。しかし沿道各所には公開緑地や街路樹、庭園があり、大学・住宅街・高層ビル・上野公園を点描の様に結んでいます。上野公園の緑に隠れて目立たないこれらの緑の点を線に、さらに面に変えていくことで、地域を繋ぐ緑のベルトができます。

不忍ウォークウェイ

不忍通りは、上野公園南側で不忍池と上野歓楽街の間を横切ります。南北を眺めつつ歩いていくと、聖と俗・公と私が出会う可能性を感じることができるでしょう。沿道を思い切ってリデザインすることで、水辺の歩道を様々な上野の顔を繋げる空間に替えていくことで、さらなる魅力を作り出すことができます。

湯島天満宮参道

湯島天神の南の参道は、本郷台地の緑に沿って神田明神の裏参道まで続いています。沿道や裏道には商店や病院が並び、生活にとって重要な道でもあります。車道と歩道をリデザインして、楽しく歩ける空間・小規模でも魅力ある店や施設が並ぶことができる環境にすることで、そぞろ歩きながら、地域性と文化資源を感じる空間とすることが可能です。

結界を魅せる

東京文化資源区の精神文化施設の多くは台地の縁に存在します。台地の縁のアップダウンは、移動を阻害する要因にもなる一方で、地域の特色を示すものでもあります。崖や階段をアップダウンを感じる場所、高さを楽しみ観望として整備することで、地形の持つ魅力を感じさせる空間を創ることが可能です。

聖別された新旧インフラ立体交差

相生坂に立つと、北側に湯島聖堂が立ち上がり、その後方には神田明神の気配を感じることができます。西に目を転じると聖橋を見上げることになり、南を望むと神田川が、その奥にはニコライ堂も見えます。川沿いの歩道として整備していくことで、こうした立体的な眺めと移動の魅力をより高めることができます。

淡路平坂

ゆるやかな淡路坂を上っていくと聖橋周辺の多数の宗教施設があり、下っていくと昌平橋・万世橋をへて秋葉原の大交差点に繋がります。坂を下るにつれレンガ積みやJR高架が現れ、精神文化・文明開化・現在の生活のつながりを感じることもできます。ややぶっさらばうらな線路沿いを愛撫良くする余地も多くあります。

文化コンデンサ

サブカルチャーの街として国際的にも有名になった秋葉原ですが、大大名の屋敷街、問屋街、電気街と多様な蓄積があります。新しい高層ビルと昔からの低層建築が混然一体となっており、南北に走るメインの道から東西に走る路地を入ると、また別の顔が見えてきます。様々な文化を蓄積し放出する、多様性を支える蓄電池です。

つながる「学問の道」

2017年に命名された「学問の道」、江戸時代には「湯島天神裏門坂通」とも呼ばれていました。黒門小学校、湯島天神、近代の匠の街という魅力あふれる地域を繋いでいますが、現在は区境で雰囲気が変わってしまいます。天神男坂下の老舗を活かしてデザインした空間に替えていくことで、文化資源区を東西に結び一体感を作れます。

徒歩のための細街路

御徒町の路地を一本入ると、小規模な店舗と住居がならぶ細い路地が多くあります。震災復興区画整理でつくられたこうした細街路は一見無表情に思えますが、観察してみると様々な個性を持っています。敢えて細いま残して自動車道と分けて子どもが遊べる道にし、徒歩で街の魅力を感じられる空間を創出することが可能です。



根津の辻



井戸のある暮らし



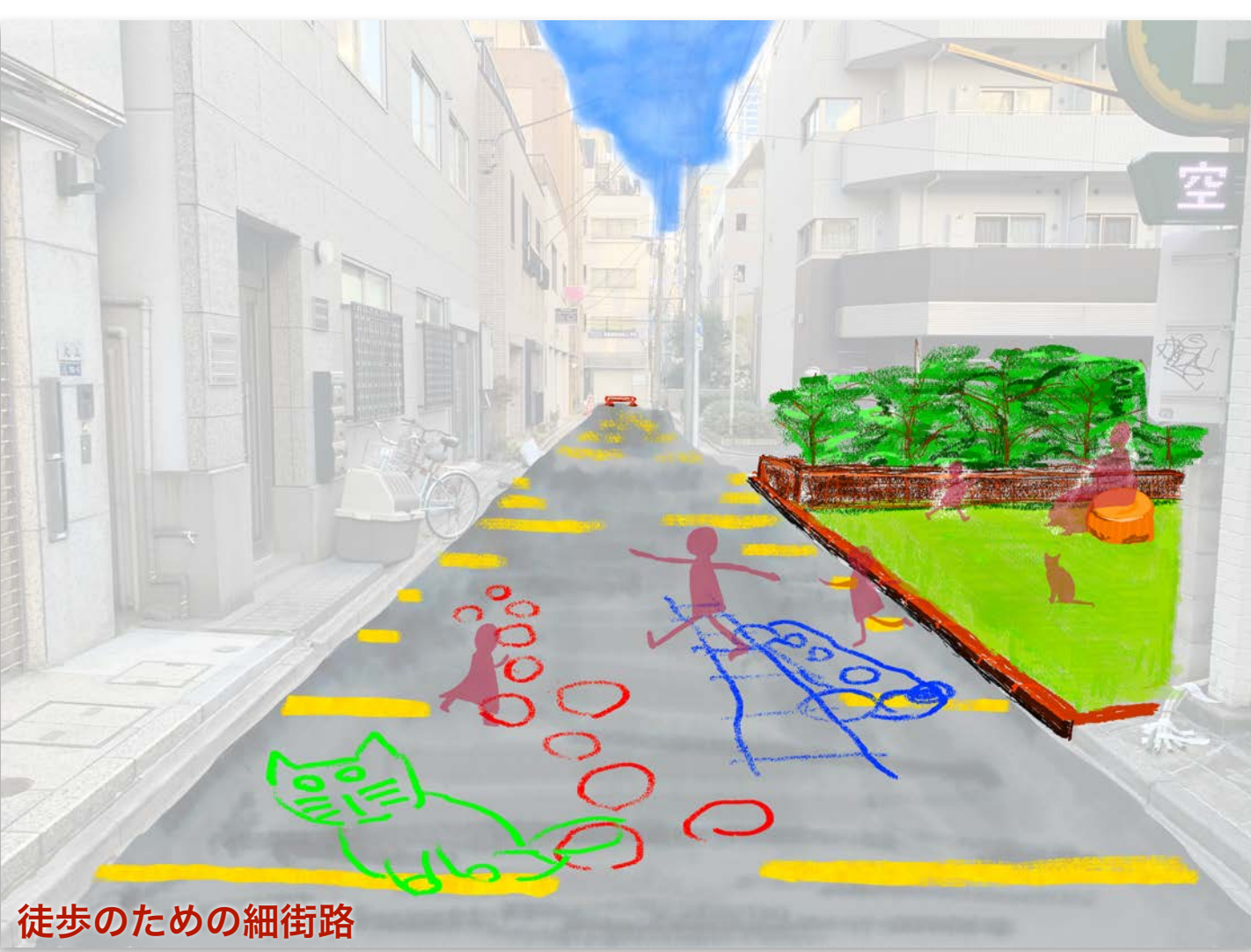
表と裏のアプローチ



緑と水のベルト



不忍ウォークウェイ



徒歩のための細街路

まちは生きている 2045 百路千辻（ももちせんつじ）

Tokyo META-PASS 2045

2020 年初頭、パンデミックが世界を襲いました。

パンデミックは都市の忙しい活動を止めてしまいました。手持ち無沙汰になってしまった私たちは少し先の未来の東京をイメージしてみたくなり、時間の流れがゆるやかになったこの一年をかけて界限を隅々までめぐりました。コロナ禍で閑散とする街の景色を眺めつつ、靴底が踏みしめる地面の感触、人や車、時には鳥の声も重なる界限の音の響き、そして、季節や界限ごとに移ろいゆく匂いなどを通じて、2021 年の東京を体感しました。

約 400 年前の江戸の整備と江戸時代を通して繰り返された大火、約 200 年前の東京への変化、約 100 年前の関東大震災、1945 年の戦災。災害・戦災と再生を繰り返す中で蓄積した文化資源によってこの地域が形成されてきたことがよくわかります。人々はここで暮らし、学び、祈ってきました。

私たちは、様々な生物がそれぞれの生を営むことで一つの生態系が成り立っているように、それぞれの界限の暮らしの積層があるからこそ、この地域がいわば森のように息づいているのだと考えています。

「まちは生きている 2045」では、このような私たちの経験を出発点として 22 世紀の東京を考えるためにこの地域から 12 か所を選び、戦災から 100 年後の 2045 年に何を残し何をリメイクすべきかを議論してきました。その成果として、未来の姿をスケッチし全体像を描いてみました。

「みち」は、人々が集って暮らすため、街が呼吸するための大切な器官です。先の大戦の後、日本の道は自動車の通行を最優先して作られてきました。私たちも、界限をめぐり歩く中でその大きな恩恵を確認するとともに、かなり無理してきたのかなとも感じました。そして、少し未来の東京では界限を歩く人にやさしい路があるといいなと思いました。子どもや猫に路を返そう、ということなのです。

私たちは、人びとが優しく生きられる町であるために「みちを調える」未来を提示します。この絵が未来を自由に議論する足掛かりとなることを心より願います。